『イリアス』第6巻におけるヘクトールとアンドロマケーの別れの場面について

―― ドライデンとポープの英訳を中心に ――

高谷　修

ヨーロッパ文学におけるホメロスの再発見は、14世紀のイタリアにおいて人文主義者であるボッカッチョ（Giovanni Boccaccio, ? 1313－75）やペトラルカ（Francesco Petrarca, 1304－74）がホメロスを読んだことに始まると言われる[1]。彼らが読んだテキストは実際にはギリシア語の原典ではなく、Leontius Pilatus によるホメロスのラテン語訳であったようであるが、ともあれ彼らによってホメロスが注目されるようになったことは否定できない事実である。しかし、その後ルネサンス期の文学的な嗜好はホメロスよりもウェルギリウスに向ったため、概してホメロスの評価は低調であったようである。しかしながら、そのような情勢の下にあって、エラスムス（Desiderius Erasmus, 1466－1536）はホメロスの文学的な特質を評価した数少ない批評家の一人であった。そして彼は『イリアス』第6巻におけるヘクトールとアンドロマケーの別れの場面を賞賛している[2]。

イギリスにおけるホメロスの受容は、実質的にチャップマン（George

1　Paul Hammond & David Hopkins, eds., *The Poems of John Dryden* (Longman Annotated English Poets, 2000), vol. 4, 1693－1696, 313.

2　Hammond & Hopkins 313.

Chapman, c. 1560－1634）に始まると言ってよいであろう。彼はまず1598年に『イリアス』訳を分冊形式で発表しはじめ、1611年にはそれらを纏めて出版した。また後には『オデユッセイア』も完成させた。このチャップマン訳を後にジョン・キーツ（John Keats, 1795－1821）が読み、感動のあまりに有名なソネットを書いたことはよく知られている。チャップマン以後17世紀には幾多の詩人がホメロス翻訳に手を染めることになるのであるが、その中にはジョン・オウグルビー（John Ogilby, 1600－1676）やジョン・ドラインデン（John Dryden, 1631－1700）などがいる。

しかしながら、それらのホメロス訳は、もとより一様ではない。原典は一つであっても、訳者の文学的な嗜好と翻訳に対する考え方によって、多様な翻訳になっている。本論文では、エラスムスが称揚した『イリアス』第6巻におけるヘクトールとアンドロマケーの別れの場面について[3]、ジョン・ドライデンとアレクサンダー・ポープ（Alexander Pope, 1688－1744）による英訳を取り上げ、両者をホメロスの原典と比較・検討する中で、それぞれの英訳の特徴を考察することを試みたい。まず、ホメロスの原典においてヘクトールとアンドロマケーの像はどのように描かれているかを検証し、次にドライデンやポープの訳においては、それがどのように英語に移されているか、または改変されているか、を考察することとしたい。

1

さて、ホメロス『イリアス』第6巻におけるヘクトールとアンドロマケーの

3　キリコに「ヘクトールとアンドロマケーの別れ」をテーマにした絵がある。それは現在、倉敷の大原美術館に収蔵されている。人物は過度にデフォルメされているが、ほのぼのとした別れのイメージが漂う。Cf. 大原美術館編『図録　大原美術館』（平凡社 1981）。図録42 Giorgio Chirico（1888－1978），“Parting of Hector and Andromaque”（Oil on Canvas, 118 × 74 cm, 1918）参照。

像を考察するに際して、まずアンドロマケー像から始め、次にヘクトール像を考えたい。第6巻の概要は以下の通りである。最初にトロイア城外の戦場の様子が描写される。目下のところ、戦況はトロイア側にとって不利な状況にある。トロイアの勇将ヘクトールは、一旦戦場から城内に戻る。その時、スカイア門と槲の木のところで、トロイアの妻達や娘達が彼の所に駆け寄って来て、夫や息子や肉親の消息を尋ねる。このような者達を彼は宥め、神々に祈りを捧げるように命じる。そして、プリアモスの屋敷に戻る。そこで母ヘキュバーはヘクトールにゼウスにお神酒を捧げ、そして彼自身もそれを飲むように薦めるが、ヘクトールはその申し出を断り、母にアテーネーの御社に詣でて、神々に犠牲と祈りを捧げるように言う。そして、彼はアレクサンドロス（パリスのこと）の屋敷に赴き、戦場に出陣するように侮辱的な言葉で彼を叱咤する。ヘレネーは、そのようなヘクトールに優しい言葉で自責の念を述べる。

そして、ヘクトールは自分の屋敷に戻るのである。すると妻のアンドロマケーは不在である。その場面は以下のように描写されている。

αἶψα δ' ἔπειθ' ἵκανε δόμους εὖ ναιετάοντας,　370
οὐδ' εὗρ' Ἀνδρομάχην λευκώλενον ἐν μεγάροισιν,
ἀλλ' ἥ γε ξὺν παιδὶ καὶ ἀμφιπόλῳ ἐϋπέπλῳ
πύργῳ ἐφεστήκει γοόωσά τε μυρομένη τε.[4]

Iliad, VI, 370－373.　（下線は筆者）

4　テキストはA T Murray, ed., *Homer, The Iliad*, (William Heinemann, & Harvard UP., 1954.) を使用した。またコメンタリーについては、G. S.Kirk, ed., *The Iliad: A Commentary*, vol. II, books 5－8 (Cambridge UP., 1990) やD. B. Monro, ed., *Homer, Iliad, books I–XII* (Oxford: Clarendon Press, 5th ed, 1924) やKarl Friedrich Ameis, ed., *Homers Ilias* (Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1900), Thomas Kerchever Arnold, ed., *Homer's Iliad* (London: Rivingtons, 1873), M. M. Willcock, ed., *Homer Iliad, I–XII* (Bristol Classical Press, 1978) などを参照した。

（直ぐに、その後で彼は構えも立派な自分の屋敷に戻った。しかし、白い腕のアンドロマケーを大広間に見出すことはなかった。彼女は、子供と美しい着物を着た侍女と共に、物見の櫓に行っていたのだ、嘆き泣きながら、涙をこぼしながらである。）

韻律は言うまでもなく、叙事詩の韻律である長短短6歩格ダクテユリコス・ヘクサメトロス dactylicos hexametros が使われている。この部分において、ヘクトールの妻アンドロマケーは「白い腕の」*λευκώλενος* と形容されている。この単語は所謂エピテトン epitheton（英語 epithet）枕詞であると解されるが、ともあれこの単語は、一般にはゼウスの妻ヘーラーに用いられる枕詞であり、それがアンドロマケーに用いられていることは、彼女の高貴さが強調されているといえよう[5]。（これについては後述する。）

この部分の描写から解ることは、アンドロマケーが、戦いの様子を見るために物見の櫓の上に出かけていること、そして彼女がかなりの興奮状態にあることである。彼女は *γοόωσα* であり、*μυρομένη* と形容されている。両方の単語ともに分詞であり、どちらも同じような意味を表している。つまり彼女は「涙を流し」「涙にくれている」のである。この表現は、一見すると二詞一意的（hendiadys）な表現と考えられなくはないようにも思われるのだが、やはりまずは強調の表現であることを確認したい。また、この部分の描写は、侍女の台詞ではなく地の文章であるから、読者（聴衆）は、近代小説におけるような

5 『イリアス』においては、このエピテトンは専らゼウスの后ヘーラーに用いられている。コンコーダンスに拠れば、『イリアス』全体で26回使われている。そのうち23回ヘーラーに使われており、残りの3回がアンドロマケーに使われている。しかも、その3回は全て第6巻のヘクトールとの別れの場面において使われていることを考えれば、いかにホメロスがアンドロマケーを高貴な人物としているかということが推し量られよう。Cf. Guy Lushington Prendergast, ed., *A Complete Concordance to the Iliad of Homer*, new edition completely revised and enlarged by Benedetto Marzullo (Georg Olms Verlagsbuchhandlung Hildesheim, 1962) 247.

語り手の信頼性を問題にする必要はないと言ってよいであろう。

この後に、ヘクトールは侍女達に、アンドロマケーは何処に行ったかと尋ねる。自分の姉妹達の処か、または弟嫁の処か、またはアテーネーの社へ出かけて他の婦人達とお祈りをしているのか、と尋ねる。すると侍女の一人が、ヘクトールと殆ど同じ言い回しで、ヘクトールが述べたような場所にではなく、彼女が物見の櫓へ出かけたことを知らせる。

つまるところ、アンドロマケーはトロイア側の戦況の不利を聞き、子供を乳母に抱かせて大急ぎで物見の櫓に駆けつけたのであった。その部分は次のように語られている。彼女の精神状態が平静ではないことは次の表現からも看取できるのである。

> *ἀλλ' ἐπὶ πύργον ἔβη μέγαν Ἰλίου, οὕνεκ' ἄκουσε*
> *τείρεσθαι Τρῶας, μέγα δὲ κράτος εἶναι Ἀχαιῶν.*
> *ἡ μὲν δὴ πρὸς τεῖχος ἐπειγομένη ἀφικάνει,*
> *<u>μαινομένῃ ἐϊκυῖα</u>. φέρει δ' ἅμα παῖδα τιθήνη."*
>
> *Iliad*, VI, 386 – 389.　　（下線は筆者）

（イーリオスの大きな城壁の上に彼女は行っていました、というのも、トロイア側に戦況は不利であり、赫々たる勝利がアカイア［ギリシア］側にあることを、彼女が聞いたからです。彼女は城壁の方へ駆けつけていたが、あたかも気の狂った女のようでした。彼女とともに乳母が子供を伴っていました。）

このような言葉を侍女はヘクトールに語る。この言葉は侍女の判断である、とも言えようが、しかし古代の叙事詩においては、近代小説の語り手とは違い、語り手の信頼性は問題にはならないと言えよう。つまりこの場面においても侍女は真実を語っている、と理解してなんら問題は無いと思われるのである。そして、ここではアンドロマケーの精神状態が、到底平静ではないことが、より明らかとなっているのである。*μαινομένῃ ἐϊκυῖα* とは直訳すれば「気の狂った

女のように見えた」となるだろう。*μαινομένη* は分詞の女性形与格であり *εἴκυῖα* はアッティカ方言では *εοικυῖα* であり、意味は「〜のように見える」である。「狂った女のように見えた」という表現を厳密に解釈すれば、彼女は狂っているのではなく、ただそのように「見えた」だけであると言うことも出来よう。しかし、狂っていると見えるほどにアンドロマケーが取り乱し周章狼狽していることは、否定のしようがない。アンドロマケーは現在、そのような状態にあるのである。

そのような彼女に、ヘクトールはスカイア門のところで、出会うのである。その様は次のように描かれている。

εὖτε πύλας ἵκανε διερχόμενος μέγα ἄστυ
Σκαιάς, τῇ ἄρ' ἔμελλε διεξίμεναι πεδίονδε,
ἔνθ' ἄλοχος πολύδωρος ἐναντίη ἦλθε θέουσα
Ἀνδρομάχη, θυγάτηρ μεγαλήτορος Ἠετίωνος, 395

Iliad, VI, 392 – 395. （下線は筆者）

（そして、大きな街を通って彼は門までやって来た時に、その門とはスカイア門であり、その門を通って彼は戦場へと出て行くのであるが[6]、そこで、多くの持参金を持って嫁いで来た妻が面と向って、走ってやって来たのだが、それはアンドロマケーであり、高邁なエーエティオーンの娘であった。）

ここでホメロスは、まずそのスカイア門のところへ、「持参金も豊かに嫁いできた妻が、面前へと走ってやって来た」と書く。この *πολύδωρος*「持参金

6　*μέλλω*＋不定詞の解釈ついては、M. M. Willcok 氏のように、「その門を通り、ヘクトールは出撃しようとしていたのだが」という理解も可能であるようだ。Cf. M. M. Willcok, ed., With Introduction and Commentary : *Homer Iliad, I–XII*, (Bristol Classical Press, 1996), 248. しかし、ここでは松平千秋氏の翻訳のように、「いずれ彼が戦場に向う通路となるスカイア門」のように理解したい。Cf.『イリアス』岩波文庫上巻、201 頁。

も豊かに嫁いできた」というエピテトンは、単なる枕詞であって意味はない、と考える向きもあるかもしれないが、ここでは意味を持つエピテトンとして考えたい。その理由の一つは、飾りの言葉として、つまり枕言葉として用いられていると考えるよりも、実質的な意味を込めて使われていると考えた方が好ましいと思われるからである。（この理由については後述する。）彼女の属性を物語るものとして用いられていると思われるのである。そのようなアンドロマケーが彼の面前へ、しかも走って、やって来るのである。この描写から彼女の狼狽ぶりが見て取れるのである。

ホメロスはアンドロマケーについて、まず「妻が、豊かな持参金を持って嫁いで来た者だが、ヘクトールの面前へと、やって来たのだ、しかも走って」と述べる。次いでその妻とはアンドロマケーで、彼女は高邁なエーエティオーン王の娘だと語るのである。この部分の語順に注目したい。つまり「豊かな持参金を持って嫁いで来た」というアンドロマケーの一面が読者に強く印象付けられることになる、と言ってよいであろう。上記の引用に続いて、エーエティオーンの説明がなされる。気象の大きなエーエティオーンは、以前は茂った森に蔽われたプラコス山の麓にある、プラコスの下のテーベーに住んでおり、キリキア人の王であった。そして心宥い王であるとされている。アンドロマケーはその娘であり、ヘクトールの許に嫁いで来た。ここでも、彼女の高貴さ、家柄の良さが再び語られている。

そのような妻アンドロマケーが涙にくれてスカイア門の所まで駆けつけて来た。彼女の後には乳母が子供を抱いていた。ヘクトールはこのような3人と出会うのであるが、その場面は次のように描かれている。

ἦ τοι ὁ μὲν μείδησεν ἰδὼν ἐς παῖδα σιωπῇ.
Ἀνδρομάχη δέ οἱ ἄγχι παρίστατο δάκρυ χέουσα,　405
ἔν τ' ἄρα οἱ φῦ χειρὶ ἔπος τ' ἔφατ' ἔκ τ' ὀνόμαζε.
"δαιμόνιε, φθίσει σε τὸ σὸν μένος, οὐδ' ἐλεαίρεις
παῖδά τε νηπίαχον καὶ ἔμ' ἄμμορον, ἣ τάχα χήρη

σεῦ ἔσομαι. τάχα γάρ σε κατακτανέουσιν Ἀχαιοὶ
πάντες ἐφορμηθέντες. 410

Iliad, VI, 404－410. （下線は筆者）

この部分を訳してみれば、一応は次のようになるであろう。（その時、彼は子供を見て静かに微笑んだ。アンドロマケーは彼の傍で涙を流して立っていた。そこでしっかりと彼の手を握り、言葉をかけ語りかけた。「夫よ、貴方の勇ましさが貴方を滅ぼすでしょう。貴方は頑是無い子供も、私のことも不幸せなことに、哀れんではくださらない。私は直ぐに貴方の未亡人になるでしょう。というのも、すぐにアカイア人達が貴方を殺すでしょうから。」）しかし、問題はアンドロマケーがこのような訳文に相応しいような態度を示しているかどうかである。彼女の態度や言葉は上のような訳文に相応しいものであろうか？　以上のような訳文とは、また異なる解釈の可能性もあるのではなかろうか、その点は詳しく検証するに値するように思われる。

まず、思い出さなければならないことは、彼女は物見の櫓に駆けつけた時点で、かなり興奮し泣き嘆き涙にくれていたことである。そして、気の狂った女性のように見えたことである。彼女の精神状態は決して平常の状態ではありえない。その点を忘れてはならない。その彼女は夫に駆け寄り、夫の手をとり、「言葉をかけ語りかけた」のである。*τ' ἔφατ' ἔκ τ' ὀνόμαζε* に見られる二つの動詞はほぼ同じことを表現している。（*ἔφατ' ἔκ* は分離動詞）。これは同じ行為の二詞一意的な（hendiadys）表現とも解されるが、しかし強調であることに変わりはない。つまり、ここでは興奮状態にあるアンドロマケーが、必死に夫に語りかけたことが強調されていると解するのが妥当であると思われるのである。心の平静を失い、必死の思いで夫に訴えかける妻こそがアンドロマケーなのである。その彼女が、以下に見るように、夫に出陣しないでくれ、と哀訴するのである。そして、またある時は夫を詰っている様子も垣間見えるのである。そのような状態にあることを勘案すれば、上に掲げた訳文よりは、彼女の狼狽ぶり、また哀訴の様子が反映されるような訳文こそが、原文の意図を忠実に移

し変えていることになるであろう。夫を詰り詰問するような調子こそが、この場面の雰囲気であろう。であれば、そのようなニュアンスを訳文は反映しなければならないと言えよう。

以上のように考えれば、この場面の雰囲気は次のようなものとなるであろう。夫よ、とアンドロマケーは「言葉をかけ語りかけ」始める。次に「貴方の勇ましさが貴方を滅ぼすでしょう」というが、この言葉のニュアンスは寧ろ、「そんなに孤軍奮闘していては直ぐに、殺されてしまいますよ」というくらいであろう。続いて「貴方は頑是無い子供にも、私のことも不幸せなことに、哀れんではくださらない」と言うが、「貴方なんか、子供のことも私のことも、（私って可愛そうだわ）全然構ってくれないのだから」のように寧ろ詰問の言葉として理解する方が妥当であろう。そして、「貴方が構ってくれない私は直ぐに貴方の未亡人になってしまうでしょう、ええ、直ぐにね。というのも、貴方なんかギリシア人が直ぐに殺してしまうでしょうから」という調子で夫を詰り詰問していると理解する方がより合理的であると言えよう。そのように考えれば、彼女の最初の言葉もまた違った意味を含んでいるように思われるのである。まず「夫よ」*δαιμόνιε*（呼格）と呼びかける。この単語 *δαίμων* はここでは「夫」という意味で使われていることに疑いはない。しかし、彼女の言葉を以上のような文脈で再考してみる時、また違った意味が浮かび上がってくるように思われる。すなわち、*δαίμων* の第一の意味は「神のような」ということである。そうすると、ここでアンドロマケーはこの単語の元来の意味をも含めて使っているとも考えられるのである。つまり、彼女が意味するところは「夫よ、神の如き方よ、いかに貴方が神の如き方であっても、貴方はそんなに頑張っていては、足元を掬われますよ、直ぐにギリシア人に殺されてしまいますよ」というくらいのニュアンスを読み取ることは、決して無理なこととは思われない。ギリシアの叙事詩においては、ローマの叙事詩と同様に、単語の配列は長短短の6歩格を保つためにかなり自由であるのが一般的である。しかし、この場面における単語の配列を考える時、ギリシア語原文の中に以上のようなニュアンス

を読み取ることは、決して的外れとは言えないと思われるのである。

アンドロマケーは、要するに夫ヘクトールに対して、出陣を見合わせることを懇願する。彼女はまず、自分の父エーエティオーンがギリシアのアキレウスの手に掛かり殺されたことを述べ、また彼女の7人の兄弟もまたアキレウスの手により同じ日に殺害されたと言う。そして母は捕虜となったが莫大な身代金を払って取り戻されたことや、その母も死を遂げたことを話す。そして今となってはヘクトールは一人で彼女の父であり兄弟であり母であるのだから、ぜひ出陣を取りやめるように懇請するのである。その様子は次のように描かれる。

ἀλλ' ἄγε νῦν ἐλέαιρε καὶ αὐτοῦ μίμν' ἐπὶ πύργῳ,
μὴ παῖδ' ὀρφανικὸν θῇς χήρην τε γυναῖκα.
λαὸν δὲ στῆσον παρ' ἐρινεόν, ἔνθα μάλιστα
ἀμβατός ἐστι πόλις καὶ ἐπίδρομον ἔπλετο τεῖχος.
τρὶς γὰρ τῇ γ' ἐλθόντες ἐπειρήσανθ' οἱ ἄριστοι 435

Iliad, VI, 431－435. （下線は筆者）

（さあ、どうぞ今は憐れみなさい、またここ、城壁に留まりなさい、子供を孤児にしないために、また妻を未亡人にしないために。で、人員をイチジクの木の傍に配置しなさい、そこはとりわけ城が容易に登れる地点だし、また城壁が容易に攻略できるところだから[7]。三度そこを（ギリシア軍の）精鋭達が攻略を試みたことがあった。）

アンドロマケーは、ヘクトールが子供を孤児にせず自分を未亡人にしないために、出陣を止めるように懇願する。そして軍の指揮はこの城壁の上から執るように請い願う。この部分におけるアンドロマケーの言葉遣いは注目に値する。

7　このイチジクの木のところが最もトロイアの城を攻め易いことは、『イリアス』第5巻433行でも歌われている。またハインリッヒ・シュリーマンがトロイアを発掘する際にも、目印としたものであった。Cf. 村田数之亮『ギリシア　英雄伝説を掘る』（沈黙の世界史3 新潮社 1969年）17頁。

ここで彼女は夫である、トロイアの勇将ヘクトールに対して命令形を用いている。つまり、夫に対して出陣を見合わせるように懇願するのだが、それは命令形によって表現されているのである。まず彼女は「さあ、憐れめ」*ἐλέαιρε* と命じる。次ぎには「留まれ」*μίμν*[*ε*] という。そして、かなり唐突に「人員を配置せよ」*λαὸν δὲ στῆσον* と命じるのである。ヘクトールは言うまでもなく、トロイア第一の武将である。その彼がトロイアの危機の時に、出陣しないなどということは、ありえないことである。アンドロマケーも冷静になって考えれば、そのことに気づくはずである。しかし、興奮し我を忘れている彼女はそんなことには気づかない。彼女は甚だしく利己的な嘆願をしている。その嘆願は利己的であり、また同時に子供じみているとも言えよう。トロイアという国のことは忘れ、己の家族のみを心配し不安に慄いている、そのような姿がこの場面におけるアンドロマケーの姿なのである。勇将である夫に対して、軍事上の指図さえしているのである。冷静に考えれば、この一点においてさえ、アンドロマケーは僭越の謗りを免れえない。いかに興奮状態にあるとは言え、その差し出がましさには驚かざるを得ないのである。

彼女の命令形の使用をどう考えたらよいであろうか。ヘクトールはトロイア第一の武勇に優れたる指揮官である。その勇将に対して命令する、などということは普通では考えられない。しかし、この場面においては、アンドロマケーが夫に対して命令形を使うことが不自然ではないような文脈をホメロスは作っていると思われるのである。アンドロマケーは、第一に、現在トロイア不利の戦況を聞き、悲嘆にくれ涙を流し気の狂ったようになっていた。この点は見逃してはならない。この理由だけでも、アンドロマケーが夫に対して、詰問調で夫に懇願するのを容赦するに十分な理由となりえるであろう。更に、既に明らかにされているように、彼女はヘーラーにも比すべき「白い腕をもつ」女性であり、良家の子女であった。キリキア人の寛大な王エーエティオーンの娘であり、その彼女は「豊かな持参金を持って」嫁して来たのであった。このようなアンドロマケーが、トロイアの危機存亡の時に臨み、夫ヘクトールに対し、対

等かそれ以上の口を利いたとしても、なんら不都合は無い様に思われるのである。そのような文脈をホメロスは作り上げていると言えるのである。

では引き続いて、そのようなアンドロマケーに対するヘクトールの態度を検証することにしたい。まず気づくことは、彼の優しさである。いかに我を忘れているとはいえ、軍事にまで口をさし挟もうとするアンドロマケーに対して、ヘクトールは、軍事のことは自分に任せておけ、と一撃のもとに退けることも可能であった。しかし、彼は決してそのような言葉遣いはしない。アンドロマケーに対する応対を見てみよう。

Τὴν δ' αὖτε <u>προσέειπε μέγας κορυθαίολος</u> Ἕκτωρ. 440
"ἦ <u>καὶ ἐμοὶ τάδε πάντα μέλει, γύναι. ἀλλὰ μάλ' αἰνῶς</u>
αἰδέομαι Τρῶας καὶ Τρῳάδας ἑλκεσιπέπλους,
αἴ κε κακὸς ὡς νόσφιν ἀλυσκάζω πολέμοιο.
<u>οὐδέ με θυμὸς ἄνωγεν</u>, ἐπεὶ μάθον ἔμμεναι ἐσθλὸς

Iliad, VI, 440 – 444. （下線は筆者）

（彼女に今度は話かけるのだ、偉大な、輝く兜のヘクトールは。「確かに、私もまた、それら全てのことが気にかかっているのだよ、妻よ。ただ、私はひどく、トロイア人や裳すそを引くトロイアの婦人達に対して恥かしいと思うよ、もしも、臆病者のように戦いから逃れたりしたら。それに、とても、そんな気持ちにはなれないよ、勇敢であることを学んだ私としては。」）

開口一番、男の仕事に女は口をだすな、と命ずるようなことをヘクトールは決してしない。そのようにしても、良かったはずであるし、また最終的には、そのような言葉を口にするのであるが、それはあくまで二人の対話の最後の最後の話である。彼はまず「私もまた、それら全てが気にかかっていたのだよ」と喋り始める。そして、特に「私もまた」*καὶ ἐμοί* という表現に注目しなければならない。「私もまた」という表現の裏側には、「お前もまた、それらのことが気になっていたのかい、私もまたそれら全てが気になっていたよ」という含

意がある。ここには「お前も戦いのことが気にかかっていたんだね」という優しい思いやりが感じられる。そしてヘクトールが出陣しないなどということは問題外のことであるが、それを伝える彼の口調はあくまでも優しさに溢れている。*οὐδέ με θυμὸς ἄνωγεν*「(戦場から) 逃れる、という気持ちにはなれないのだよ」という表現にも、妻に対する心遣いがひしひしと伝わってくるのである。

そのように考えれば、ヘクトールの台詞の導入部である440行目もまた違った含意を含んでいると理解することが出来るように思われるのである。*μέγας* は普通には「偉大な」を意味する単語で、当然ヘクトールを修飾している。しかし、また同時にこれは、子供に対する大人という意味にもなり得るのである。そして *κορυθαίολος* は「輝く兜の」という意味を表す形容詞で、ヘクトールを修飾するエピテトンとも考えられる。この行は、表面的には、「彼女に今度は話かけるのだ、偉大な、輝く兜のヘクトールは」という意味であろうが、同時にまた異なる含意を含んでいることに注意しなければならない。つまり、この表現は、「ヘクトールは、大人であったので、まるで子供に対するように(優しく) 語りかけ、また武勇に優れたる勇将であったので、アンドロマケーの指図など、歯牙にもかけず拒否できたのであるが、そうはしなかったのだ」というニュアンスをもっている表現と理解することが可能と思われるのである。この部分は、全体的にそのような理解を可能にするような表現となっていることを見過ごしてはならない。こうしたホメロスの表現の中に、興奮状態にある妻アンドロマケーに対して、あくまでも優しさを失わないヘクトールの姿が浮かび上がって来るのである。

妻アンドロマケーを宥める中で、ヘクトールは次のような言葉を語る。それは余りにも有名な3行である。

εὖ γὰρ ἐγὼ τόδε οἶδα κατὰ φρένα καὶ κατὰ θυμόν.
ἔσσεται ἦμαρ ὅτ' ἄν ποτ' ὀλώλῃ Ἴλιος ἱρὴ
καὶ Πρίαμος καὶ λαὸς ἐϋμμελίω Πριάμοιο.

Iliad, VI, 447 – 449.

（私はこのことを、心でも頭でもよく知っているのだ。いつか聖なるイーリオスも、プリアモスも、またとねりこの槍を使うプリアモスの民も、滅びる日が来ることを。）

この3行は、違う文脈ではあるが、ギリシア側のアガメムノンが、『イリアス』第4巻（163－165行）において口にする台詞とまったく同じものである。また、カルタゴを滅ぼしたローマのスキピオ・アフリカーヌスが、焼け落ちるカルタゴを眺めながら、思い起こしていたのは、この3行であった[8]。この3行には、ある種の格調の高さが伺われる。しかし、このヘクトールの言葉が語られるのは、アンドロマケーを宥めようとしている文脈においてである。ヘクトールは、トロイアも滅びるのだよ、と宥めている場面で、語られる表現なのである。格調の高さが強調されがちなのは理解できるが、寧ろ、耽々とした雰囲気でヘクトールが喋る言葉として受け止める方がよい、と思われるのである。（そして、後述するが、ドライデンは、この3行をまさに格調高く訳しているのである。）

ヘクトールの優しさはアンドロマケーにだけ向けられているのではない。アンドロマケーを宥めたヘクトールは、乳母が抱いている息子スカマンドリオスを眼にする。この息子は、「都市の守護者」を意味するアステュアナクスという別名でも呼ばれている。ふと、この息子に眼を留めたヘクトールは、思わず子供の方に手を伸ばす。その場面は、次のようである。

ἄψ δ' ὁ πάϊς πρὸς κόλπον ἐϋζώνοιο τιθήνης
ἐκλίνθη ἰάχων, πατρὸς φίλου ὄψιν ἀτυχθείς,
ταρβήσας χαλκόν τε ἰδὲ λόφον ἱππιοχαίτην,
δεινὸν ἀπ' ἀκροτάγης κόρυθος νεύοντα νοήσας. 470
ἐκ δ' ἐγέλασσε πατήρ τε φίλος καὶ πότνια μήτηρ.

8 Thomas Kerchever Arnold, ed., *Homer's Iliad* (London : Rivingtons, 1873) 190 n 参照。

αὐτίκ' ἀπὸ κρατὸς κόρυθ' εἵλετο φαίδιμος Ἕκτωρ,
καὶ τὴν μὲν κατέθηκεν ἐπὶ χθονὶ παμφανόωσαν.

Iliad, VI, 467－473.　　（下線は筆者）

（後ろへと、子供はしっかりと帯を締めた乳母の胸へ泣きながら身を反らせた、愛情溢れる父の姿に怯え、真鍮の（兜と）馬毛の飾りが兜の頂きから揺れているのに怖気づいてのことである。愛情溢れる父はそれを見て声を立てて笑ったが、また高貴な母もそうした。即座に、誉れも高いヘクトールは頭から兜を脱いだ。そして眩く輝くその兜を地面に置いた。）

ホメロスはここでも、愛情深い父親というヘクトール像を壊さないように描いている。468行目では、「子供は愛情溢れる父親の姿に驚いて」*πατρὸς φίλου ὄψιν* と書いてあり、次行では続けてその姿が詳しく説明されている。つまり、その恐れた姿とは、「真鍮の（兜と）馬毛の飾りが兜の頂きから揺れている」父の姿なのである。厳密には、子供は父親に怯えたのではない。些細な点のように見えるが、この違いは大きいのである。そして、次には父親の恐ろしい姿に怯えた子供の様子を見た「愛情溢れる父は、声を立てて笑い、そして高貴な母も笑った」のである。このような夫婦の姿にも、何かおおらかな、ほのぼのとしたものが感じられるのである。この箇所について見れば、日本語訳の中には、父を形容する「愛情溢れる」という単語を訳さないものも見られる。例えば、岩波文庫新版の『イリアス』訳はこの単語を訳してはいない[9]。また Eugene Lasserre に拠るフランス語訳も同様に訳出してはいない[10]。その理由は恐らくは、この単語を単純にエピテトンとしてのみ機能していると考えるからであろう。しかし、この *φίλος* という単語は実質的な意味を持っていると考える方が寧ろ合理的であるように思われるのである。

「愛情溢れる」父親は子供が怯えているのを見ると、「直ぐに」兜を脱ぐ。接

9　松平千秋訳『イリアス』（岩波文庫 1992年）上巻 205頁。

10　Eugene Lasserre, tr., *Homere : L'Iliade*（GF−Flammarion, 1965）120.

続詞も何もなく、この「直ぐに」という意味を表す *αὐτίκ[α]* が、次行の一番最初に置かれている。このことは、行為が瞬時に行われたことを表している。いかに素早くヘクトールが兜を脱いだかということを示していると言えるであろう。この単語が行の最初に置かれることによって、ヘクトールの行為の素早さが強調されているのである。そして、それは言うまでもなく、愛情故の行為なのである。このようなヘクトールは、実に思い遣りと愛情に溢れる勇士であると言わざるを得ないのである。

こうして、スカイア門のところで、妻と出会ったヘクトールはアンドロマケーを慰めた後に、会話の最後の最後においてはじめて、「戦いは男たちに、取り分け自分に任せておきなさい」と言うのである。その様は以下のようである。

ἀλλ' εἰς οἶκον ἰοῦσα τὰ σ' αὐτῆς ἔργα κόμιζε, 490
ἱστόν τ' ἠλακάτην τε, καὶ ἀμφιπόλοισι κέλευε
ἔργον ἐποίχεσθαι. <u>πόλεμος δ' ἄνδρεσσι μελήσει</u>
<u>πᾶσι, μάλιστα δ' ἐμοί</u>, τοὶ Ἰλίῳ ἐγγεγάασιν."

Iliad, VI, 490 – 493. （下線は筆者）

（家に戻って、貴方自身の仕事に励みなさい、機を織ること紡ぐことをしなさい。また侍女達を仕事に精を出すように励ましなさい。戦いは全ての男の、イーリオスに生まれた者の、仕事だが、取り分け私の仕事なのだから。）

ヘクトールはアンドロマケーとの会話の最後の最後になって、戦いは男の仕事だ、取り分け自分に任せておけ、と語る。ここには、彼自身の責任と自負心が表白されている。もとより、ヘクトールは何よりも武人として優れているが、そのことは、言うまでもない前提となっている。ホメロスは、ヘクトールとアンドロマケーの別れの場面において、武人としての側面は殆ど描いてはいない。むしろ強調されるのは、ヘクトールの優しさや思い遣りである。この点は記憶

されるべきことのように思われる。

屋敷に帰り仕事に励むようにヘクトールに諭されて、アンドロマケーはとぼとぼと歩いて屋敷へと帰る。その様は次のようである。

...ἄλοχος δὲ φίλη οἰκόνδε βεβήκει　495
ἐντροπαλιζομένη, θαλερὸν κατὰ δάκρυ χέουσα.
αἶψα δ' ἔπειθ' ἵκανε δόμους εὖ ναιετάοντας
Ἕκτορος ἀνδροφόνοιο, κιχήσατο δ' ἔνδοθι πολλὰς
ἀμφιπόλους, τῇσιν δὲ γόον πάσῃσιν ἐνῶρσεν.
αἳ μὲν ἔτι ζωὸν γόον Ἕκτορα ᾧ ἐνὶ οἴκῳ.　500

Iliad, VI, 495－500.　（下線は筆者）

（愛しい妻は、何度も振り返りながら、さめざめと泣きながら、家へと歩いた。直ぐに見事な構えの、兵どもの殺し手ヘクトールの屋敷に着いた。屋敷では多くの侍女と会ったが、彼女達の間に嘆きの声を掻き立てた。彼女達は未だ生きているヘクトールを彼の屋敷の内で悼んだ。）

ヘクトールとアンドロマケーの別れの場面を通して、アンドロマケーは常に涙を溢れさせ嘆いている。スカイア門から屋敷に戻る時とて、同様である。彼女はたびたび振り返りながら泣いているのである。しかも、さめざめと*θαλερόν* 泣いているのである。

この『イリアス』第6巻のヘクトールとアンドロマケーの別れの場面におけるアンドロマケーの像は、次のように言うことができるであろう。彼女はトロイア不利の戦況を聞き、気も動転し狂ったようになっている。そして、トロイアの、また夫の将来を悲観して涙にくれているのである。そして、スカイア門において、偶々夫を見出した時、彼に駆け寄り、出陣しないでくれ、と懇願する。その懇願はトロイアを取り巻く現下の情勢を考慮すれば、極めて自己中心的な、また子供じみた懇願であると言わざるをえないのである。そして、第6巻を通して、このようなアンドロマケー像に変化はない。そのような人物としてアンドロマケーは描かれていると言うことが出来るであろう。

また一方、彼女の夫ヘクトールは、トロイア王プリアモスの子供であり勇猛をもって鳴る武将である。その勇将という彼の一面は前提となっており、とりたてて言及がなされるわけではない。寧ろ強調されるのは、彼の妻や息子に対する思い遣りと優しさである。妻の「出陣しないでください」という理不尽な、しかし切実な、要求にも、彼は実に優しさ溢れる言葉遣いで応答するのである。そして対話の最後には、しかし言うべきことをしっかりと言うのである。また未だ幼い我が子に対する態度にも、優しさが溢れている。第6巻におけるヘクトールは、勇猛果敢な武将というよりも、優しい一人の夫であり父なのである。ホメロスはこのような人物としてヘクトールを描いているのである。エラスムスがこの場面の賞賛していることは既に述べたが、このようなホメロスの技巧を考えてみる時、それも当然のことであると言えよう。

2

ジョン・ドライデンは1699年10月に書かれたと推定される、チャールズ・モンタギュー（Charles Montague, 1 st Earl of Halifax, 1661－1717）宛ての手紙の中で、進行中のホメロス翻訳に触れて、ホメロスの方がウェルギリウスよりも自分の才能に合っている、と書いている。曰く、'My thoughts at present are fixd on Homer: And by my translation of the first Iliad; I find him a Poet more according to my Genius than Virgil'.[11] このホメロスとは、後に1700年に出版される『古今説話集』*Fables Ancient and Modern* に収録されることになる、『イリアス』第1巻の翻訳を意味している。ドライデンは同じ趣旨のことを *Fables* の Preface においても記しているが[12]、ドラ

11 Charles E. Ward, ed., *The Letters of John Dryden* (Duke University Press, 1942) 121.

12 James Kinsley, ed., *The Poems of John Dryden*, vol. 4 (Oxford: Clarendon Press, 1958) 1448.

イデンがホメロスに接近するのは、晩年になってのことである。ドライデンの興味は、全生涯を通じて寧ろウェルギリウスのようなラテン詩人に向けられており、ホメロス訳に手を染めるのは、人生の晩年に至った1690年代以降のことであった。

そのような事情もあって、ドライデンのホメロス訳はわずか2編を数えるに過ぎない。その2編のうち、他の1篇が『イリアス』第6巻の「ヘクターとアンドロマケーの別れの場面」の翻訳なのである。このホメロス訳は、彼がジェイコブ・トンソン（Jacob Tonson, c 1656－1736）が出版していた『雑詠集』Miscellany Poems の第3集 *Examen Poeticum*（1693）の為に提供したものであった。（この場合 Examen とは "a Poetic Swarm of Bees" を意味し、収められた作品は、色々な源から集められた「蜂蜜」であることを暗示している[13]。）

そして、*Examen Poeticum* の序文において、ドライデンはホメロスの特質を論じて、ホメロスを少し逐語訳過ぎる程に訳した、という趣旨のことを述べている[14]。しかし、ドライデンの英訳が本人の言うような翻訳になっているかどうかはまた別の問題である。以下、ドライデンの訳はどのようなものであるか、それを検討したい。結論を先取りして言えば、ドライデンに「逐語訳」という意識があったにせよ、以下に見るように、現代の感覚からすれば、ドライデンの翻訳は到底逐語訳と言えるようなものではない。そして、またヘクトールとアンドロマケーの像も、微妙に原典とは違うものとなっている。ホメロスのヘクトールとアンドロマケーはドライデンにおいては、どのように描かれているであろうか。ドライデンにおいて、問題のヘクターとアンドロマケーの別れの場面は、次のように始まる。

13　A. B. Chambers & William Frost, eds., *The Works of John Dryden*, vol. 4 (University of California Press, 1974) 696.

14　*The Works of John Dryden*, vol. 4, 373. "I have Translated, perhaps too literally."

Thus having said, brave *Hector* went to see
His Virtuous Wife, the fair *Andromache.*
He found her not at home; for she was gone
(Attended by her Maid and Infant Son,)
To climb the steepy Tow'r of *Ilion*: 5
From whence with heavy Heart she might survey
The bloody business of the dreadful Day.
Her mournful Eyes she cast around the Plain,
And sought the Lord of her Desires in vain[15]

Dryden, 1–9. (下線は筆者)

(このように言って、勇敢なヘクターは彼の有徳の妻、麗しいアンドロマケーに逢いに帰った。彼は屋敷に妻を見出せなかった。というのも、彼女は(乳母と幼い子供に伴なわれて)イリオンの高い塔に登っていたからだ。そこから彼女は重い心で恐ろしい一日の戦いの帰趨を眺めるのだった。哀しみの溢れる眼を戦場に向け、そして彼女の望みの殿を無益にも探すのであった。)

ホメロスの原典においては、ヘクトールは自分の「見事な構えの」屋敷に戻ってくるのだが、そのような屋敷の豪華さはドライデンにおいては、まったく閑却されている。上に掲げた引用のうち、後半の4行には、直接的に対応する部分は原典にはない。そして最後の行「彼女の希望の殿を探したが、無駄だった」というのは、原典にはなく、全くドライデンによる追加である。ドライデンは、このように、全般的には、paraphrase 的な翻訳をしながらも、時には原典にはなくとも、独自の判断で加筆を行っていることが判るのである。そして翻訳の傾向として、上の引用からも判るように、形容詞が多用され、叙述が平明で解説的であることに気づく。

15 ドライデンからの引用は、A. B. Chambers & William Frost, eds., *The Works of John Dryden*, vol. 4 (University of California Press, 1974) に拠る。

ドライデンの翻訳は、このホメロス訳に限らず、概して原典の奥行きを捨象し全てを明らかにするような訳文になることが多い。ここにおいても、アンドロマケーは最初から、heavy Heart（沈んだ心）を持ち、眼は憂いに沈んでいる mournful Eyes のである。原典において、人物の行動やそぶりで示される内的な心理は、ドライデンにおいては明示的に示されることが多いが、ここでもそうである。ホメロスにおいては、アンドロマケーは、トロイア側の不利を聞き、狼狽し涙にくれていた。しかし、ドライデンにおいては、アンドロマケーは、単に「沈んだ心を持ち」「憂いに沈んだ眼」をしている女性である。原典に見られるような、狼狽し涙にくれているアンドロマケー像とは、かなり異なる像になっていることが、既に看取できるのである。

この部分は、23頁において引用した原典に対応する部分である。形式的にはドライデンは原典のダクテュリコス・ヘクサメトロス（長短短の6歩格）を、アイアンビック・ペンタミター（弱強調5歩格)、所謂英雄2行連句で訳していることに気づくが、この韻律はドライデンが以前に古典詩の翻訳において、度々用いているから、なんら驚くにはあたらない。また、翻訳の様式であるが、これも、以前の翻訳を知る読者にとっては、予想の範囲内であると言うことが出来る。

ドライデンは、基本的に翻訳を3種類に分類して考えていたことはよく知られている。その考えを1680年に出版した *Ovid's Epistles* に付けた序文の中で明らかにしている[16]。要点を手短に言えば、彼は3種類の翻訳を考えていた。パラフレーズ paraphrase, メタフレーズ metaphrase, それに模倣 imitation の3種である。paraphrase は原典に忠実な逐語的な翻訳であり、metaphrase は、原典を翻訳者は視野の中に留めながらも、より自由に訳す様式のことである。模倣とは、原典からインスピレーションを受けつつ、原典には拘らずに独自の世界を作り上げるやり方のことである。('模倣' は現代では翻訳とは言え

16　W. P. Ker, ed., *Essays of John Dryden* (OUP) vol. 2, 235.

ないかもしれないが、ドライデンは翻訳の一種と考えていたのである。）そして、このホメロス翻訳においても、ドライデンはホメロスの逐語訳的な翻訳にはあまり拘泥してはいないことは明らかである。（後で見るように、部分的に原典を正確に訳している部分もあるが、そのような部分は極めて少ない。）

ドライデンの翻訳における興味の一部は、原典への忠実さよりも、より巧みな英語表現に傾いているとも言える。それは、例えば次のような部分にも見て取れるのである。ヘクターは侍女に、アンドロマケーは何処へ行ったかと尋ねる。侍女は、アンドロマケーはトロイ側が苦戦していると聞いて、物見の櫓へ出かけた、乳母が子供を抱いて後に従っている、と応える。その部分を次のように訳している。

> There to survey the Labours of the Field;
> Where the *Greeks* conquer, and the *Trojans* yield.
> Swiftly she pass'd, with Fear and Fury wild,
> The Nurse went lagging after with the Child.
>
> Dryden, 22－25　　（下線は筆者）

> （そこで、戦場の成り行きを概観したが、ギリシア軍が圧倒し、そしてトロイ側は敗走していた。素早く彼女は駆けて行ったが、恐怖と狂乱に襲われており、乳母が子供を連れて、その後を追っていた。）

引用の2行目の「ギリシア軍が圧倒する一方でトロイ側が敗走している」という部分は原典にはなく、ドライデンの付加である。この行には、ドライデンの関心の一部が表れている。それは、行中での対照的な表現である。（このような表現の様式は、ポープの訳にも認められるものであるが、その点については後で触れる。）また3行目においては with Fear and Fury wild とアンドロマケーの様子が描写されている。この部分は原典の *γοόωσα τε μυρομένη* に対応する部分とも考えられなくはない。しかし、むしろドライデンの関心は頭韻 alliteration という定型的な表現によって、翻訳にある種の堅牢さを与えたい、

という希望に発しているように思われるのである。とすれば、ここでも原典への忠実さよりも英語表現への興味が優先していると言えそうである。

ドライデンが描くアンドロマケー像は、次第に原典とは異なって来ている。アンドロマケーは、戦況を悲観し、また狼狽し涙にくれている、という一面は初めから等閑視されていた。そしてドライデンが強調するのはアンドロマケーの高貴さや情愛の深さである。そうした一面は、次の引用によく現れている。

He pass'd through every Street, by which he came,
And at the Gate he met the mournful Dame.
　His Wife beheld him, and with eager pace,　　30
Flew to his Arms, to meet a dear Embrace:
His Wife, who brought in Dow'r *Cilicia*'s Crown;
And, in her self, a greater Dow'r alone:
Aetion's Heyr, who on the Woody Plain ...

Dryden, 28－34　　（下線は筆者）

（彼は自分が通って来たあらゆる通りを過ぎて、そして門のところで哀しみに沈む夫人に出会った。彼の妻は彼に気づいた、そして息を切らせて彼の腕に飛び込み、いとおしい抱擁にあう。彼の妻は、持参金としてキリキアの王冠を持ってきたが、彼女一人がより大きな持参金なのである。樹木茂る平野を統べるエエティオンの相続人であった……）

スカイア門において、ヘクターは妻アンドロマケーと出会い、抱擁される。その様は to meet a dear Embrace と書かれている。これは原文にはない。原文においては、二人は単に出会うだけである。ドライデンにおいては、アンドロマケーは「暖かい抱擁」に合うのである。そしてまた、ドライデン的な特徴は、アンドロマケーその人の描写の中に見られる。原文においては、アンドロマケーは「多くの持参金をもって嫁いできた」とされていた。それがドライデンにおいては、アンドロマケーはキリキア人の王冠を持参金として嫁いで来た者であるが、また同時に in her self, a greater Dow'r alone「彼女自身が、よ

り大きな持参金である」とされているのであった。つまり、どれほど持参金としての金品が多かろうと、より大きな持参金がアンドロマケーその人それ自身なのだ、と言うのである。持参金の話はドライデンにおいては、また別の話になっている。この変更によって、アンドロマケーの高貴さが強調されているのである。この点は見過ごしてはならない。ドライデンは少しだけ変更している。そしてその変更に伴なって全体が変質している。この変質の中に、ドライデン的な特徴が現れていると言えよう。そのような変質がもっとも顕著に現れているのが、次の引用であろう。原文においては、アンドロマケーがヘクターに、出陣しないように詰め寄る場面である。

Hector beheld him with a silent Smile,
His tender Wife stood weeping by, the while 45
Prest in her own, his Warlike hand she took,
Then sigh'd, and thus Prophetically spoke.
Thy dauntless Heart (which I foresee too late,)
Too daring Man, will urge thee to thy Fate:
Nor dost thou pity, with a Parent's mind, 50
This helpless Orphan whom thou leav'st behind;
Nor me, th' unhappy Partner of thy Bed;
Who must in Triumph by the *Greeks* be led:
They seek thy Life; and in unequal Fight,
With many will oppress thy single Might:

Dryden, 44－55. （下線は筆者）

（ヘクターは子供を静かな微笑みで眺め、彼の優しき妻はその間、傍らに涙を流しながら立っていた。自らの手の中に、夫の勇壮無比な手をとり、それから、ため息をついて、以下のように預言者の如くに語った。貴方の恐れ知らずの豪胆が、（それを私は予見していましたが遅過ぎました）、あまりにも勇壮な方よ、貴方を貴方の運命へと急がせるでしょう。また、貴方は親の心で、この不幸な子供も哀れんでは下さらない、この子を貴方は後に残して行くでしょう。また私をも、貴方とベッドを共にするする私を

も［哀れんでは下さらない］。私はギリシア人によって凱旋の式に引き立てられるでしょう。彼らは貴方の命を狙っています。そして、形勢不利な中で、多勢に無勢で、貴方を打ち倒すでしょう。）

ヘクターの手は「勇壮無比な」warlike と形容されている。これは原文にはない。原文では前提となっていたヘクトールの武勇は、さり気なく、しかし明確に、読者に印象付けられる。そして、アンドロマケーの言葉の中には、原文に見られるような夫を詰るような調子は見られない。詰問するような、また子供じみた調子はない。アンドロマケーは、優しい妻 tender Wife とされている。これは、既に描かれている姿（2行目 virtuous Wife）とも整合している。そして彼女は冷静な、文字通り預言者のような姿として、描かれている。彼女は預言するかのように（prophetically)、喋る。そして、その通りに、彼女の言葉には預言者の言葉のような調子が感じられる。彼女は夫に対して、自分と子供をおいて出陣しないようにと懇願するというよりも、むしろ将来を予言するような姿勢が感じられるのである。ここにはホメロスの原文とは、決定的な違いがあるのである。

アンドロマケー像については、ホメロスの原文とドライデン訳については、以下のように言うことが出来るであろう。原文において、トロイアが滅亡の危機にあるという知らせをアンドロマケーが聞いた時、アンドロマケーの心は乱れ、彼女は涙を流し我を忘れたようになっていた。そのような女性として、描かれていた。しかし、ドライデンでは、このような姿はむしろ等閑視されている。代わりに、さり気なく印象づけられるのは、アンドロマケーの高貴さ・上品さである。そして、ある種の達観である。そのような達観のうえで語る預言者のようなアンドロマケーの姿である。ホメロスにおけるアンドロマケーはこのような変質を被っているのである。

では、ドライデンにおいては、ヘクトールはどのように変えられているだろうか、次にそれを検証したい。原文においてホメロスが、スカイア門の物見の櫓のところにおいてアンドロマケーから涙の嘆願をされたヘクトールを、妻を

優しく労わり愛情溢れる思いやりを見せる夫として、描いたことは既に指摘した。ではその部分に対応する箇所をドライデンはどのように翻訳したであろうか。以下は、その部分のドライデン版である。

That and the rest are in my daily care;
But shou'd I shun the Dangers of the War,
With scorn the *Trojans* wou'd reward my pains,
And their proud Ladies with their sweeping Trains. 105
The Grecian Swords and Lances I can bear:
<u>But loss of Honour is my only Fear.</u>
Shall Hector, born to War, his Birth-right yield,
Belie his Courage and forsake the Field?
Dryden, 102－109. （下線は筆者）

（そのことも、他のことも、私は日々配慮を欠かしてはいない。しかし、もしも私が危険ゆえに戦場を放棄すれば、トロイ人達は、私の労苦に軽蔑で応えてくれるだろうし、また、裳すそを引く誇り高いトロイの女達も同様だろう。ギリシア軍の剣や槍には耐えることが出来る。しかし、名誉を失うことだけが、私の恐れなのだ。ヘクターは、戦う為に生まれたのだから、生得の権利を放棄し、勇気を偽り、戦場を放棄などしようか？）

大筋においてドライデンは、原文に忠実である。ただ一つ、忠実でない一行がある。それは、下線部107行である。ここでヘクターは、自分は名誉を失うことを唯一恐れている、という。ホメロスの原典においては、ヘクトールが勇猛無比な武人であることは、作中では描かれてはいないが、当然の前提となっていた。そして、ヘクトールはアンドロマケーを宥めるにあたり、諄々と諭している雰囲気があった。名誉の問題をも口にする。しかしドライデンにおいては、名誉は異なる様相を呈している。ドライデンにおいて、ヘクターが「しかし、名誉を失うことだけが、私の恐れなのだ」という部分に注目したい。原文においても、名誉という言葉は言及されている。ドライデンにおいては、名誉

とはヘクター自身の名誉に関わる問題であった。しかし、原文においてはそうではない。

原文の当該の箇所は、「父の大きな名誉を、そして私自身の（名誉を）勝ち得るべく、(戦うように……)」という程のことを意味していた。原文においては、名誉とはまずヘクトールの父プリアモスの名誉を意味する。そして、付け足しとしてヘクトール自身の名誉が言及されるのである。しかし、ドライデンにおいては、父プリアモスの名誉はまったく無視されており、ヘクター個人の名誉のみが問題視されている。この点に、ドライデンの意図が読み取れるのである。ドライデンは、ヘクターを勇壮な武人として位置付けたいのである。これはホメロスにおいては前提とされていた一面であるが、この点をドライデンは殊更、持ち出して来るのである。

ドライデンの翻訳の傾向は、一般に格調高い調子の英語を使うことを好むことである。そのような傾向は、トロイが陥落することを知っている、とヘクターが言う場面にも窺うことが出来る。ヘクターの以下の言葉のことである。

> And yet my mind forebodes, with sure presage,
> That *Troy* shall perish by the *Grecian* Rage.
> The fatal Day draws on, when I must fall;
> And Universal Ruine cover all.
>
> Dryden, 114－117　　（下線は筆者）

> (そして、私の心は、確かな予感で知らせるのだ、トロイがギリシアの怒りの前に滅亡することを。運命の日が近づいている、その時には私は倒れねばならぬ。そして滅亡が遍く全てを覆うのだ。)

トロイの滅亡をドライデンが格調高く描こうとしていることは、言うまでもない。(スキピオ・アフリカーヌスが、焼け落ちるカルタゴを見て、ホメロスの3行を思い起こしたことは、既に指摘した。) 最後の行、'And Universal Ruine cover all' からは、Pope の『愚人列伝』*The Dunciad* 第4部の最後

の行を連想するであろう。ポープは『愚人列伝』の最後において、この愚鈍の帝国を飾る言葉として、'And Universal Darkeness buries All' と書いた[17]。Twickenham 版の編者である James Sutherland 氏は指摘していないが、ポープがドライデンよりインスピレーションを得ていることは明らかである。文体の格調ということはドライデンが考えていたことの一つである。

ホメロスにおいては、ヘクトールはアンドロマケーを宥めた後で、乳母が子供を連れていることに気づく。子供を抱こうと手を伸ばすと、子供はヘクトールの厳しい姿に怯えて乳母の方に身を反らせる。それを見てヘクトールとアンドロマケーは声をたてて笑う。そしてヘクトールは素早く兜を脱ぎ、子供を愛撫する。その場面は、ドライデンでは次のようになっている。この場面の描写にも、ドライデンの意図を読み取ることができそうである。

The fearful Infanct turn'd his Head away;
And on his Nurse's Neck reclining lay, 145
His unknown Father shunning with affright,
And looking back on so uncouth a sight:
Daunted to see a Face with Steed o're-spread,
And his high Plume, that nodded o're his Head.
His Sire and Mother smil'd with silent Joy; 150
And Hector hasten'd to relieve his Boy;
Dismiss'd his burnish'd Helm, that shone afar,
(The Pride of Warriours, and the Pomp of War)

Dryden, 144－153. （下線は筆者）

（怯えた子供は頭を後ろに反らした。そして乳母の首に抱きついたが、恐怖で見知らぬ父を避けんがため、であった。そして奇怪な姿を振り返って見た。鉄の兜を頭に着け、羽飾りが高く頭の上で揺れている姿に慄いてい

17 James Sutherland, ed., *The Poems of Alexander Pope*, vol. 4 (Methuen, The Twickenham Edition, 1943) 409.

た。彼の父と母はそれを見て、沈黙の喜びをもって微笑んだ。そしてヘクターは急いで彼の息子を恐れから解いた。遠くまで輝き光る兜を放した。（それは武人の誉れであり、戦いの栄光であったが。）

正確に言えば、ホメロスの原文においては、息子のアステユアナクスが恐れるのは父の姿であった。恐れたのは、恐ろしい鎧や兜を着けた父の姿であり、父ヘクトールその人にではなかった。しかし、ドライデン訳で注目されることは、息子が「見知らぬ父親」His unknown Father に怯えていることである。息子が「見知らぬ父親」とはどういう意味であろうか。（ここでは、「鎧や兜に身を包んでいたので、息子のアステユナクスは、ヘクターを父とは認めることが出来なかった」という解釈はとらない。）それは一つには、ヘクターが戦いにかまけて、家庭のことを等閑に付しているためかもしれない、という思いをおこさせるに十分である。ヘクターの心は、妻や息子よりも寧ろ戦争の方に向けられている。それも無理からぬことではあるが、原文において、ヘクトールの優しさが強調されていることと比較すると、相違点は顕著である。

また、子供が怯える姿を見た二人は、原文では声をたてて笑うのであるが、ドライデンではそうではない。二人は静かに微笑むだけである。ドライデンにおいては、勇猛なる武人とその妻は、子供の怯える姿を見て、声を出して笑うなどというはしたない真似はしないのである。ここでも、ドライデンの意図は明らかである。ドライデンはヘクターをまず何よりも、冷静で同時に高貴な武人として描き、同様にアンドロマケーも、そのような夫に相応しい妻として、描こうとしていることが推察できるのである。そしてこのようなドライデンの傾向は、引用の最後の言葉（The Pride of Warriours, and the Pomp of War）「武人の誉れであり、戦いの栄光」という言葉において、顕著になるのである。この一行は原文にはない。ドライデンの創造であり追加である。ここでドライデンは、兜こそは武人の誉れであり、戦いの栄光である、と述べている。このような原文にはない追加によって、ヘクターの武人としての一面が強

調される結果になっている、と言えるだろう。

そのようなドライデンの翻訳における姿勢を、象徴的に明らかにしているのが以下の場面である。ヘクターはアンドロマケーを慰め、そして屋敷に帰って侍女達を励まし家事に精を出しなさい、と諭す。そして、戦いは男達に任せておきなさい、と言う。その場面はドライデンでは、以下のようになっている。

Return, and to divert thy thoughts at home,
There task thy Maids, and exercise the Loom,
Employ'd in Works that Womankind become.
The Toils of War, and Feats of Chivalry
Belong to Men, and most of all to me.

Dryden, 183－187. （下線は筆者）

（帰りなさい、そして屋敷で気を紛らせなさい。侍女達を監督し、機を織りなさい。女性に相応しい仕事に精を出しなさい。戦争の遂行、そして騎士道の勲功は男に、そして取り分け私に、属することだから。）

大体は原文に忠実に訳されていると言えよう。しかし、見過ごすことが出来ないのは、下線部である。この下線部はドライデンの追加であり、原文にはない。ここでドライデンは、Chivalry 騎士道という言葉を持ち出している。この言葉は、言うまでもなく、騎士道や騎士道精神を意味する。*OED* を参照するまでもなく、主に中世において使われ始めた言葉である。この言葉を狭義に解釈すれば、トロイア戦争当時には、このような Chivalry は存在しないが故に、完全なアナクロニズムであると言えよう。ドライデンは要するに、戦いを、中世の騎士道精神に則ったもので、勝利すれば限りない誉がもたらされるものとして、描こうとしていると言うことが出来るのである。ドライデンは、ヘクターについて、まるで中世の騎士のような、名誉を第一に考える武人として、人物造形を図っているのである。ヘクターが戦うのは、まるで中世の騎士の戦いであるようである。このような追加にドライデンの翻訳の特徴が象徴的に現

れていると、言えるであろう。ドライデンのヘクター像はChivalryという言葉に極まっていると言えるのである。

さてアンドロマケー像については、先に、原文に描かれているような、気も動転し涙にくれて狼狽している姿が、ドライデンの翻訳ではかなり感情的に抑制され沈着で冷静な姿に変わっていることを指摘した。その姿は最後に至るまで変わってはいない。屋敷に戻る場面はドライデンでは次のように訳されている。

His lovely consort to her House return'd :　190
And looking often back in silence mourn'd :
Home then she came, her secret Woe she vents,
And fills the Palace with her loud Laments :
Those loud Laments her ecchoing Maids restore,
And Hector, yet alive, as dead deplore.

Dryden, 190－195.　（下線は筆者）

（彼の愛しい配偶者は彼女の屋敷へ戻る。度々見返りながら、静かに嘆いた。屋敷に着いた時はじめて、彼女は秘密の胸の嘆きを漏らした。そして彼女の大きな悲しみの声で屋敷を満たした。大きな嘆き声を侍女たちも返し、まだ生きているヘクターを、既に亡き者として深く悼んだ。）

アンドロマケーはヘクターに諭されて、屋敷に戻る。ホメロスにおいては、アンドロマケーは涙を流しつつ何度もヘクトールを見返していた。しかもさめざめと泣いて *θαλερὸν κατὰ δάκρυ χέουσα* いたのである。当然、声に出して泣いていたであろう。ところが、ドライデンにおいては、アンドロマケーは嘆いてはいるが、あくまで「静かに」慨嘆しているのである。そして、屋敷に戻り初めて嘆きを、いわば爆発させるのである。帰宅するまでは必死に悲しみに耐え、屋敷に戻った時、初めて大きな声で悲嘆を吐露するのである。そこに、必死に悲しみに耐えている健気な女性という像が浮かび上がるのである。

ドライデンは1677年にシェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』*Troilus and Cressida* をもとに、同名の芝居を書いた。この芝居はトロイ戦争を背景に、トロイラスとクレシダを軸に展開する。そしてアエネアスやヘクターといったトロイ側の武将も登場する。アンドロマケーも姿を現すのであるが、第二幕第一場における彼女の次のような台詞は注目に値する。トロイの柱ヘクターがもしも倒れたら、トロイもまた滅亡するのだ、と心配する者達の間にあって、発言を促されたアンドロマケーは、健気にも I would be worthy to be Hector's wife というのである。「私は（勇敢な）ヘクターに値する妻でありたい」と言うのである。この言葉には、彼女の心情が吐露されていると言えよう[18]。

ドライデンの翻訳において、纏めていえば、ヘクターとアンドロマケーは次のような人物として描かれていると言えるであろう。ヘクターはまず何よりも、武人である。その面がとりわけ強調されている。そして、彼はまるで中世の騎士のようである。騎士道精神に則って戦いに赴く武人である。またアンドロマケーも、ホメロスにおけるように泣き崩れ狼狽し、子供じみた願いを夫にするような女性ではない。雄雄しい夫に相応しくありたいと願い、自己を律する女性でもある。このような姿の夫婦として、描かれており、原文とは全然違う像となっていると言えるのである。ヘクトールとアンドロマケー像はドライデン訳においてそのような変化を被っている、と言えるだろう。

3

アレクサンダー・ポープの詩集の決定版といもいうべき Twickenham Edition において、第7巻から第10巻を占めるホメロス翻訳の4巻を担当し

---

18 Montague Summers, ed., *Dryden, the Dramatic Works*, vol. 5 (New York: Gordian Press, 1968) 46.

たメイナード・マック（Maynard Mack）氏は、『イリアス』翻訳の序文を、ポープがホメロスを訳し出版した事情は度々論じられてきたので、ここでは概説するまでもないだろう、という言葉ではじめている（Twickenham Ed. Vol. 7, p. xxxv)。その言葉の通り、ポープのホメロス翻訳に関する諸々の事情は、識者が度々論じたところであるので、そちらに譲ることにしたい[19]。

ポープのホメロスの出版にまつわる事情は、それ自体考察の興味深い対象であるが、ここでは論じない。当面の我々の興味は、ポープ訳の特徴の幾つかを検討することである。そのために、まず「ヘクターとアンドロマケーの別れの場面」において、ヘクターが屋敷に戻る場面の描写からはじめたい。その場面は次のようになっている。

At home he sought her, but he sought in vain;
She, with one Maid of all her Menial Train,　465
Had thence retir'd; and with her second Joy,
The young *Astyanax*, the Hope of *Troy*.
Pensive she stood on *Ilion's* Tow'ry height,
Beheld the War, and sicken'd at the Sight;[20]
Pope, VI, 464－469.　（下線は筆者）

（屋敷でヘクターはアンドロマケーを探したが、しかし無駄だった。彼女は、全ての侍女達のうちで、一人を連れて、そこから出かけていたからだ。そして彼女の第2の喜び、トロイの希望、若きアステユアナクスと、イリオスの塔の高みに立って物思いに沈んでおり、戦場を概観し、その光景に

19　ポープのホメロス翻訳に関する事情については、ジョンソン博士の「ポープ伝」や、Owen Ruffhead, *The Life of Pope*（1769.), J. W. Courthope, *Life of Pope*, (Elwin and Courthope Edition), George Sherburn, *The Early Career of Alexander Pope*（Oxford: Clarendon Press, 1934）などを参照。

20　『イリアス』からの引用は、Alexander Pope, *The Poems of Alexander Pope*, vol. 7, ed. Maynard Mack（London: Methuen, The Twickenham Edition, 1967）に拠る。

気分を悪くしていた。)

ポープが用いた韻律は、ドライデン同様に弱強調5歩格iambic pentameterである。しかしながら、趣はかなり異なる。例えば、ポープは召使達のことをMenial Trainと書いているが、ドライデンのMaidと比較すれば、その狙いが判ろうというものである。ポープの狙いの一つに、まず格調の高さがあると思われる。高い物見の櫓もポープではTow'ry Height(櫓の高み)と訳されている。このように具体的な表現から抽象的な表現への変更ということも、ポープ訳の一つの特徴であろう。ポープはこのような言い回しを好むようである。

また、子供であるアステユアナクスは「若きアステユアナクス、トロイの希望」と表現されている。この表現は「彼女の第2の喜び」と同格であり、補足的に付加されているが、原文にはない。(この点については、後で触れるが、ここでは原文にはないことだけを指摘しておきたい。)

ドライデンの翻訳はドライデンの評言とは裏腹に、原文の逐語訳的な忠実さには、あまり注意を払ってはいなかった。同様にポープもまた、大筋において原文を逐語訳しようとしているのではなさそうである。彼の関心は、むしろ英語表現の彫琢にあるように見える。ドライデンの評言を借りて言えば、原文を視野の中におさめながらも、かなり自由に原文を展開させることに関心は向けられている、と言えそうである。そのような例として、次の一節を挙げることができよう。アンドロマケーが、物見の櫓の上で、戦況を概観し嘆く場面は、ポープでは次のようになっている。

To *Ilion*'s steepy Tow'r she bent her way, 480
To mark the Fortunes of the doubtful Day.
Troy fled, she heard, before the *Grecian* Sword;
She heard, and trembled for her absent Lord:
Distracted with Surprize, she seem'd to fly,
Fear on her cheek, and Sorrow in her Eye. 485

The Nurse attended with her Infant Boy,
The young *Astyanax*, the Hope of Troy.

Pope, VI, 480－488.　（下線は筆者）

（イリオンの高い塔に彼女は道をとったが、目下の戦いの帰趨を探るためであった。彼女は聞いた、ギリシア軍の刃の前にトロイ軍は敗走していると。彼女は聞いて、夫の姿を見出せなくて震えた。驚いて落胆し、逃げ去りたく思われたが、頬には恐怖を浮かべ眼には悲しみを湛えていた。乳母が彼女の幼ない子供、トロイの希望、若きアステユアナクスと共に、彼女に付き添っていた。）

'Troy fled, she heard, before the Grecian Sword'「彼女は聞いた、ギリシア軍の刃の前にトロイ軍は敗走していると」の部分は、恐らくはドライデンの訳に――'Where the Greeks conquer, and the Trojans yield' ギリシア軍が圧倒し、そしてトロイ側は敗走していた――に依拠していると言ってよいであろう。ここにはポープが詩的と考えることの意識が表れていると言えそうである。一行の中で、ドライデンにおいては単純に Greeks と Trojans が対比的に描かれていた。ポープにおいては、Troy 側と Grecian Sword が対比されている。同じく対比的な表現ではあるが、ドライデンほど単純ではないところに、ポープ的な特徴を見ることができると言えよう。

また、'Fear on her cheek, and Sorrow in her Eye'「頬には恐怖を浮かべ眼には悲しみを湛えていた」という部分にも、同様に、一行の中の対比的な表現を見ることができる。このような表現は、後の "An Epistle to Dr Arbuthnot"「アーバスノット博士への書簡」(1735年) の中の三文作家の描写を思いださせる。すなわち 'Fire in each eye, and papers in each hand'「眼は血なまこになり、手には（詩を書き記した）紙を手にして」という表現である[21]。このような行の中における対比的な表現は、ポープの考える詩的な

21 Alexander Pope, *The Works of Alexander Pope*, vol. 4 (London: Brown, 1847) 324.

彫琢ということの一面を明らかにしていると思われるのである。

そして、上記の引用の最後の行も見過ごすことは出来ない。この行は、「トロイの希望」the Hope of Troy という追加の部分を除けば、原文と穏やかにではあれ、対応しているのである。しかし、この一行はすでに、以前に使われていた。(53頁のポープからの引用参照。) ホメロスが、ダクテユリコス・ヘクサメトロス(長短短調6歩格)を駆使するにあたり、度々同じような表現を使い回ししたことが知られている[22]。ホメロスにおいては、同じような文脈においては、全く同じ言い回しが用いられることは珍しくはない。「ヘクトールとアンドロマケーの別れの場面」だけ見ても、その繰り返し表現に気づくのである。例えば、ヘクトールが屋敷に戻るところを描写した一行、*αἶψα δ' ἔπειθ' ἵκανε δόμους εὖ ναιετάοντας* (370行) は、実は、アンドロマケーがヘクトールと分かれて屋敷に戻る497行目とまったく同じ表現となっている。また、ヘクトールが、いつかはトロイアも滅亡するのだ、という思いに耽る447行から449行に至る3行は、またアガメムノンが既に、第4巻 (163 − 165行) において口にした言葉と同じであったことは、既に指摘した。そして、一行全く同じではないにしても、部分的な繰り返しもまた眼につくのである。部分的な同一表現は、主に行の中の5番目6番目のフット (foot) に認められることが多い。そのような例の一つとして、涙を流すアンドロマケーが挙げられよう。彼女は涙を流している *δάκρυ χέουσα* (405行) が、これは496行目においても繰り返されている。

この様に、同一の表現を使い回しすることが、ホメロスの特徴の一つであるが、ポープもまた、その精神に則って、同じことをしていることが判るのである。アステユアナクスを「若きアステユアナクス、トロイの希望」と形容した表現の繰り返しについては指摘した。このようなところにも、ホメロス的な特

---

22 このあたりの事情は小著ながら、高津春繁『ギリシアの詩』(岩波新書) に詳しい。特に「叙事詩の技巧」41 − 70頁参照。

徴が保存されていると言うことは可能であろうと思われる。

ポープはドライデン同様に、弱強調の5歩格 iambic pentameter を用いているが、同一性はそこまでであって、結果としての翻訳はかなり違ったものになっている。二人の相違点は、アンドロマケーがヘクターに出陣をしないように嘆願する場面において、最も大きな違いを窺うことが出来そうである。原文においては、アンドロマケーは泣き崩れんばかりの様相で、夫に子供じみた、また身勝手な、言葉を投げかけていた場面である。ポープ訳では以下のようである。

Silent the Warrior smil'd, and please'd resign'd
To tender Passions all his mighty Mind :　505
His beauteous Princess cast a mournful Look,
Hung on his Hand, and then dejected spoke ;
Her Bosom labour'd with a boding Sight,
And the big Tear stood trembling in her Eye.
　Too daring Prince! Ah whither dost thou run?　510
Ah too forgetful of thy Wife and Son!
And think'st thou not how wretched we shall be,
A Widow I, and helpless Orphan He!
For sure such Courage Length of Life denies,
And thou must fall, thy Virtue's sacrifice.　515
Pope, VI, 504－515.　（下線部は筆者）

（静かに、戦士は微笑んだ、そして全ての雄雄しい心から優しい心に身を任せた。彼の美しい王妃は哀しげな視線を投げかけたが、彼の手をとって、そしてそれから落胆して話した。彼女の胸は不吉なため息に苛まれており、そして大きな涙が彼女の瞳には震えていた。「大胆過ぎる殿よ、ああ何処へ貴方は行くのですか？　ああ、貴方の妻も子供もお忘れになって。貴方は我々がどうなるかは、お考えにならないのです。未亡人に、私はなるのですよ、可愛そうな孤児に、彼はなるのですよ！　というのも、そんな蛮勇では長生きはできません。貴方は滅びるに違いありません、貴方の力の

犠牲となって。)

ここでドライデンの翻訳との顕著な違いを窺うことが出来る。ドライデンにおいては、アンドロマケーは、まるで預言者のように語った（Prophetically spoke）のであった。あたかも、ヘクターが殺され、トロイが滅びるのを耐え忍んでゆこうとするかの如き諦観をもって、喋っているようであった。ドライデンにおいては、アンドロマケーはそのような姿で描かれていた。ところが、ポープにあっては、「落胆して話した」dejected spoke のであった。そして、話す内容も、当然ながらかなり違う印象を与えている。ポープにおいては、ドライデンに見られるような諦観はない。寧ろ、あるのは、ある種の訴えの性急さである。アンドロマケーは短刀直入に「何処へゆくのですか？」と訊ねる。そして、自分や子供のことを夫が忘れている、とヘクターを責める。この辺りの性急さは原文を思わせる。そしてアンドロマケーは、大胆過ぎることが却って命取りになるのだ、と述べる。ヘクターが死ぬと、自分は未亡人になり、子供は孤児になる‘A Widow I, an helpless Orphan He!’と嘆くのだが、表現自体の中にアンドロマケーの、性急さ、迫り来る死への恐怖、そして同時に我が儘さが表現されている。未亡人に私はなる、と言うのだが、A Widow という単語が行の最初に置かれており、如何にも我が儘な言葉の雰囲気が活写されていると言えるであろう。また、ヘクターの蛮勇では長生きは出来ない、という意味のことを言うが、「死は貴方のような力自慢が支払うべき犠牲だ」というようなニュアンスを含んでいる。その点にも、夫に対する不人情な姿勢が看取できるのである。このようなアンドロマケーは、まことにホメロスの原文のアンドロマケー像に近いと言えよう。

このようなアンドロマケーは、上の引用の部分だけに留まるものではない。次のような箇所にもまた同様なアンドロマケーを見ることが出来るのである。アンドロマケーは、ヘクターに出陣を思い留まるように迫る。アンドロマケーにとって、父母をアキレウスに殺され、また兄弟をも殺された今となっては、

夫ヘクターは、父であり母であり兄弟であり、夫であるのだ。だからヘクターを失うことは全てを失うことだ。だから戦場に赴くことは思い留まってください、とアンドロマケーは涙ながらに訴えるのである。その様子はポープでは以下のようになっている。

Thy Wife, thy Infant, in thy danger share:
Oh prove a Husband's and a Father's Care!
That Quarter most the skillful *Greeks* annoy,　550
Where yon' wild Fig-Trees join the Wall of Troy:
Thou, from this Tow'r defend th' important Post;...
Thrice our bold Foes the fierce Attack have giv'n,
Or led by Hopes, or dictated from Heav'n.
Let others in the Field their Arms employ,
But stay my *Hector* here, and guard his *Troy*.
Pope, VI, 548－552; 556－559.　（下線は筆者）

（貴方の妻、貴方の幼い子供にとって、貴方の危険は、同様に危険なのです。ああ、夫の、また父親のすべき配慮を示してください。あそこを、戦に巧みなギリシア人達が攻めています、あの野生のイチジクの木がトロイの城壁と接している所です。貴方はこの櫓の上から大切な場所を守りなさい。……三度、我らの勇敢な敵側は、果敢な戦いを仕掛けました。他の者たちには、戦場で武器を揮わせなさい、でも私のヘクターはここに留まりなさい、そしてここでトロイを守りなさい。）

ここでもまた、ドライデン訳とは異なり、原文に対する忠実さが現れている。ホメロスにおいては、イチジクの木の場所をギリシア軍が攻めたのは過去において3回であった。ポープはそれを忠実に訳している。しかし、ドライデンは‘And thither all their Pow'rs are daily bent’「そしてあそこに、日々彼らの全勢力が向けられている。」（93行）と訳していることを見れば、ポープとの違いは明らかとなる。また、アンドロマケーは「他の者たちには、戦場で武器を揮わせなさい、でも私のヘクターはここに留まりなさい、そしてここでト

ロイを守りなさい」、とヘクターに迫っている。彼女は要するに、トロイの他の兵士達を戦場に出陣させ、自分の夫であるヘクターは城内に留まりトロイを守れ、と言うのである。このような身勝手さは、原文のもつアンドロマケーの子供じみた利己的さをよく反映する表現となっていると言えよう。つまり、ポープの訳を仔細に探ってみれば、ホメロス的な特徴が忠実に訳されている部分があることが判って来るのである。この点は記憶されてよいであろう。

原文に対する忠実さという時に、色々な忠実さが考えられるが、ここでは忠実さという時、まず原文に対する言語上の忠実さと理解することにしたい。つまり、最も基本的な意味において、ホメロスの用いた言語を忠実に再現している点に注目したいのである。その意味の忠実さがポープにはあることを指摘したいのである。そのような傾向を窺い知る例として、次の例が挙げられる。ポープの志向している特徴を比較的に明瞭に見ることができる例である。

The Babe clung crying to his Nurse's Breast,
Scar'd at the dazling Helm, and nodding Crest.
With secret Pleasure each fond Parent smil'd,
And *Hector* hasted to relieve his Child,
The glitt'ring Terrors from his Brows unbound, 600
And plac'd the beaming Helmet on the Ground.
Pope, VI, 596 – 601. (下線は筆者)

(子供は乳母の胸に抱きついたが、恐ろしい兜と、その揺れる羽飾りに怯えてのことであった。心の内で密かに喜んで、それぞれの、子供を愛する親は微笑んだ。そしてヘクターは急いで子供の(恐れを)解いてやった。彼の頭から輝く脅威を脱ぎ、光輝く兜を地上に置いたのだ。)

ここでは、「輝く脅威」という格調の高い言葉が使われていることに注意しなければならない。叙事詩的な格調ということは、ポープが常に意識していたことであった。そして、この表現はまた、「具体の代わりの抽象」abstract for concrete という範疇のものである。このような言葉の使用は、ポープにお

いては特徴的なことである。この点は留意すべき点の一つである。さらに、子供が怯えるのは、ドライデンにあっては、ヘクターその人に対してであることは、既に見たとおりである。ポープは、この点では原文に忠実である。子供のアステユアナクスは「恐ろしい兜と、その揺れる羽飾り」に怯えているのであって、決してヘクターに怯えるのではない。またここでは、怯えて泣き乳母に抱きつく子供を見て、ヘクターとアンドロマケーは、「静かに微笑む」のであるが、この点ではドライデンと共に原文から逸脱している。原文では、二人は声をあげて笑うのであった。

しかし、この点は必ずしも、ポープもまた原文から逸脱しているというような単純な話ではなさそうである。それは次のような事実があるからである。ホメロスの翻訳は、16世紀の後半に、まずジョージ・チャップマン George Chapman に拠ってなされた。彼は、まず『イリアス』を翻訳した[23]。それは1598年から分冊形式で発表され最終的に完結したのは1611年のことであった。また『オデユッセイア』翻訳も同様の形式で公表され、完結したのは1615年であった。(チャップマンのホメロス訳は、ジョン・キーツ John Keats (1795－1821) がチャップマン訳の賞賛のソネット "On First Looking into Chapman's Homer" を書く契機になったことは、既に述べた通りである。)

さて、そのチャップマン翻訳において問題の箇所は、'Laughter affected his great Sire' と訳されている[24]。チャップマンにおいては、妻アンドロマケーは無視されているが、それはここでは問題とはしない。チャップマン訳において、ヘクターは怯える子供を見て、微笑むのではなく笑うことに注意すれば十分である。チャップマン訳はイギリスにおけるホメロス訳の嚆矢とされるが、そのチャップマン訳においてヘクターがこのように描かれているということに注目しておきたい。

23　George Chapman, *Chapman's Homer, the Iliad* (Princeton University Press, Bollingen Series, XLI, 1998), Introduction 参照。

24　Chapman 150.

しかし、チャップマンにみられるような翻訳の姿勢は、その後、イギリスにおいて変わってくるようだ。17世紀の後半に、ドライデンの直前にホメロスを翻訳した一人に、哲学者のトマス・ホッブス（Thomas Hobbes, 1588－1679）がいるが、彼の翻訳では、既にドライデン的な志向性が窺われるのである。つまり、問題の箇所はホッブスでは次のように訳されている。

And when he thus had said his Arms he spread
　The child to take, who terrifi'd thereby,
And unacquainted with a glittering Crest
　And Horses Mayn that nodding at it hung,
Turn'd his face crying to nurses Breast,
　And with his little arms close to her clung.
Which made his Father and his Mother smile.[25]

（そして、彼がこのように言って、子供を抱こうと、
　腕を伸ばした時に、子供は怯えた。
そして、輝く羽飾りや、そこで揺れている
　馬の毛には、馴染みがなかったので、
泣きながら乳母の胸の方へと顔を背けた。
　そして彼の小さな腕で乳母に抱きついた。
そのことが彼の父と彼の母を微笑ませた。）

ホッブス訳では、以上のように、「子供が怯えるのを見たことが父と母を微笑ませた」となっている。子供が怯えるのを見て、声に出して笑うことが、この時期には、既に感覚的に好ましくない趣味として受け取られていることが判るのである。このような「声をたてないで微笑む」ということへの志向は、ホッブスあたりに始まっているのである。そしてドライデンにも引き継がれて

25 Thomas Hobbes, *The Iliads and Odysses of Homer*（AMS, 1979, reprint of the 2nd edition printed in 1677 for W. Crook）94. なお、ホッブスの『イリアッド』の初版は1674年。英語訳に行数は記入されていない。

いることは、言う必要はないであろう。ポープもまた、声を出さないで微笑むように訳したが、17世紀のホメロス翻訳の文脈においてポープの『イリアス』を眺めてみる時、このような趣向は、ただ一人ポープの趣味ではなく寧ろ時代の趣味であったと言うことが出来るように思われるのである。

叙事詩的な格調への志向と、細部への意外な忠実さは、最後まで変わることはない。ヘクターに諭されたアンドロマケーは屋敷へ戻る。その場面においても、このような二つの特徴を認めることが出来る。ドライデンは、アンドロマケーを哀しみに耐える女として描いた。彼女は帰宅する途中、必死に涙をこらえながら歩むのであった。その場面は、ポープでは次のようである。

His Princess parts with a prophetick Sigh,　640
Unwilling parts, and oft' reverts her Eye
That stream'd at ev'ry Look : then, moving slow,
Sought her own Palace, and indulg'd her Woe.
There, while her Tears deplor'd the Godlike Man,
Thro' all her Train the soft Infection ran,　645
The pious Maids their mingled Sorrows shed,
And mourn the living *Hector*, as the dead.

Pope, VI, 640 – 647.　（下線は筆者）

（彼の王妃は予言的なため息をついて、後ろ髪を引かれる思いで、別かれて去ったが、度々見返る毎に涙を流した。それから、ゆっくりと歩きながら屋敷を目指し、悲しみに浸った。そこで、彼女の涙が神々しい男を悼む間に、哀しみは侍女達の間を伝わり、敬神厚い彼女らはその複雑な哀しみの涙を流し、まだ生きているヘクターを亡き者として、悼んだ。）

ポープにおいては、アンドロマケーは、「見返る毎に涙を流す」のである。ドライデン訳との違いは歴然としている。原典への意外な忠実さが認められるのである。同時にヘクターは「神のごとき男」the Godlike Man とされている。また屋敷の召使達は「敬神厚い侍女達」the Pious Maids と形容されてい

る。叙事詩的な格調への志向は、最後まで貫徹しているのである。

以上に見たように、ポープの翻訳における志向として、主に二つの点を指摘することが出来る。一つは、ポープが英語を用いて翻訳するにあたり、格調高い表現を志向していることである。もう一つは、細部における原文への忠実さである。原文に対する忠実さという場合、忠実さとは何か、という問題が生じる。「原文に忠実」といっても、事は単純ではない。『イリアス』は長短短6歩格で語られ、全体では1万5千行を越える大作である。それが織り成す局面は実に多様であることは、言うを俟たない。小さくは、単語のレベルから大きくは全体の構想やその展開にまで及ぶ。それらの局面を全て勘案すれば、忠実という問題は複雑な大問題であることは容易に想像される。

しかし、単語の最も基本的な使用法に焦点を絞って考えれば、忠実さの問題も、難しいながらもやや取り扱い易い問題と思えて来る。一般的には、ポープ訳は表面上の華麗さ故にホメロス的ではない、とされて来た。例えば、当代きっての古典学者であったRichard Bentley（1662－1742）は、ポープのホメロス訳について、「あれは佳い詩ですね、ポープさん、でもあれをホーマーと呼ぶことは出来ませんね。」'it is a pretty poem, Mr Pope, but you must not call it Homer' と述べたことはよく知られている[26]。しかし、ベントリーの評言にも拘わらず、仔細に検討してみれば、細部において原文の意図を忠実に英語に移し変えている、といえる箇所があるのである。ポープ訳は従来の評価に反して、ホメロスの原文に対して意外に忠実であることが確認できるのである。多くの批評家の評言にも拘わらず、ポープ訳には原典に対する、ある種の忠実さがあることは、これまで見てきたことによって明らかになったと思われるのである。この点は従来はあまり顧みられなかった点であり、記憶されてよいと思われるのである。

---

26 Maynard Mack, *Alexander Pope, a Life* (Yale UP, 1985) 348.

4

古来、ホメロスに魅せられた詩人は多い。1996年にGeorge Steinerは Aminadav Dykamanの助けを借りて、*Homer in English*を出版した。この本は文字通り、ジョフリー・チョーサー（1130？－1400）以来、陸続と発表された幾多の英訳の中から精選収集したものである[27]。この本は、各時代において、それぞれの詩人が、如何にホメロスを受容してきたか、ホメロスをどのように理解してきたか、という問題について示唆を与えるものとなっている。

ホメロスを如何に訳すべきか、という問題はあまりにも大きな問題である。語彙、文体、思想など考察すべき点は多岐に亘る。「ホーマー翻訳論」"On Translating Homer" で有名なマシュー・アーノルド（Matthew Arnold, 1822－88）はホメロスの特徴を4つに分類し精緻な論を展開しているが[28]、彼自身が実践した翻訳は到底成功しているとは言えないことを考えれば、如何にホメロスを訳すことが難しい問題であるか、判ろうというものである。

本論文では、多岐に亘る問題点の中から、『イリアス』第6巻のヘクトールとアンドロマケーの別れの場面において、この二人がどのように描かれている

---

27 George Steiner, ed with an Introduction and Notes, with the Assistance of Aminadav Dykaman, *Homer in English* (Penguin Classics, 1996). Steinerは*Homer in English*をチョーサーの『トロイルスとクリセイデ』から始めている。チョーサーの『トロイルスとクリセイデ』は直接的にはボッカッチョの*Il Filostrato*の翻案であって、ホメロスの翻訳ではないが、ボッカッチョ自体がホメロスに依拠していることも、また否定できない事実である。尚、六反田収教授が『英文学評論』第70集（1998年2月）において、チョーサーの『トロイルスとクリセイデ』とボッカッチョの*Il Filostrato*に描かれたクリセイデについて論じたことは、記憶に新しいところである。

28 Matthew Arnold, 'On Translating Homer' in *The Works of Matther Arnold*, vol. 5 (Macmillan, 1903) 153－327.

か、という問題に焦点をあて、二人の像がドライデンとポープの英訳においてはどのように英訳されているか、という問題を考察してきた。ホメロスの原典におけるヘクトールは次のように言えるであろう。彼が勇壮無比な武将であることは、間違いないが、そのことはあまり言及されない。むしろ強調されるのは、彼の優しさや思いやりのこころである。ヘクトールはあくまでも優しい人物として描かれている。またアンドロマケーは、周章狼狽し我を忘れたような存在として描かれている。トロイの戦況の不利を聞いて、悲嘆にくれている。そして、そのような状況で夫ヘクトールに出会い、いささか子供じみた、また利己的な発言をする。彼女はそのような人物として描かれていると言えるであろう。

このような二人をドライデンは翻訳において改変している。ヘクトールの優しさは閑却されて、むしろ彼の武将としての一面が強調されている。あくまでも、彼はトロイの為に戦い名誉を重んじる勇敢な武人である。そして、その彼が目指すものは 'Feats of Chivalry'（騎士道に則る誉れ）なのである。また、彼の妻アンドロマケーも、そのような夫に相応しい、健気に苦難に耐える夫人として描かれている。既に指摘したがドライデンの劇『トロイラスとクレシダ』のなかで、アンドロマケーは、'I would be worthy of Hector's wife (II, i)' と言う[29]。まさにそのような姿に描かれている。ドライデンにおいては、二人はこのように描かれていると言えよう。

ポープ訳は弱強の5歩格を用いた点ではドライデン訳と共通している。幾分、内容を18世紀的にしている点でもドライデンと共通性がある。（例えば、Palace とか Prince とか、Court というような単語を用いている点は、共通性の一つである。）ポープは、さらにポープ流の彫琢を加えている。多くの修飾語を加え、全体を荘重な感じに高めている。その中で原典のホメロス的なもの

29 Monague Summers, ed., *John Dryden, The Dramatic Works*, vol. 5 (New York : Gordian, 1968) 46.

は、失われたと考えられて来た。リチャード・ベントリーが、ポープの翻訳をホメロスと呼ぶことはできない、と述べたことは指摘した。その彼の意見にそのような見方は代表されると言えよう。

しかし、ベントリーの言葉は、いささか独り歩きしているように思われるのである。「ポープのホメロスはホメロスではない」と断言するためには、そもそもホメロスとは何か、ということが厳密に吟味されなければならない。小さな点では、語彙、シンタックス、その他の技法、(Hendiadys, Prolepsis, Chiasmus)、などから大きくは、ホメロスの思想や、展開の速さ、またその他の問題がある。それらを検討の上で、総合的に判断されなければならない。例えば、マシュー・アーノルドは、ポープとクーパーのそれぞれのホメロス訳を比較し、ポープの方がクーパーよりも、rapid であるので、ホメロス的である、と述べた[30]。この様にホメロスの展開が rapid である、という点を主要な要素と考えれば、逐語訳的なクーパーの訳よりもポープの方がホメロス的であると言うことも可能になるのである。ホメロスをどう考えるかによって、また評価も変わると言えよう。

ポープの訳は、一般には、ホメロスではない、と言われる。確かに、語彙、シンタクス、技法、また格調の高さ、などから判断すると、ホメロス的ではない、という説は首肯せざるを得ないようにも思われる。しかし、仔細に検討してみれば、既に見たように、予想外に原典に忠実であるような細部が存在することが、判るのである。ポープ訳には、やはりホメロスの原典の精神を移し変えた点があるのである。このようなポープ訳の特徴は、記憶されてよいのではないか、と思う。

以上、『イリアス』第6巻の「ヘクトールとアンドロマケーの別れの場面」について、基礎的な作業として、まずホメロスの原典を検討・分析し、その特質を確認した。次に、ドライデンとポープの翻訳を仔細に比較検討し、それぞ

30　Arnold 166.

れの翻訳の特徴の一端を指摘した。彼らがそのように翻訳した理由を探ることもまた重要な問題であるが、ともあれホメロスの原典の特質を考察したうえで、英訳の伝統を辿りながら、ドライデンそしてポープの翻訳の特質を指摘することは、またそれ自身の意味を持つものであろうと考える次第である。

（本稿は2002年10月5日十八世紀英文学研究会（於同志社大学）における口頭発表草案に基づくものである。）